

花を褥

(大正七年寮歌)

松本五六君 作歌
峰秀雄君 作曲

一

花を褥の草枕

霞に暮るる野辺の春

ローマの晨ナイルの夕べ

栄華よあはれ夢の跡

傾く月に猶心せず

驕奢に酔ひし人々の

惰睡を破る雄叫や

健児義を取る北の国

二

世の敗類に神怒り

南の洋に濤さわぎ

腥風荒さび天日暗く

欧亜の文華影消えぬ

堯舜去りて妖雲霽れず

江河汜濫れて未濁る

暴虐無道幾年ぞ

吾等立つべき時ぞ今

三

煙霞曠しき石狩の

荒野に立ちて嘯けば

霜枯れ吹雪く原始の森に

エルゼの歌も微かなり

手稲の嶺に夕陽淡く

宇宙の神秘畏れみて

雄々しき自然に育まれ

雲呼び沖天に翼搏たん

四

春の女神の訪れに

花は綻び鳥謡ひ

翠の樹蔭に鈴蘭香り

露の涼しき夏の朝

時雨に漂ふ牧場の紅葉

白雪晴るる冬の景

書読む歳は豊平の

時の流れに恵あり

五

薫る春風アカシヤの

情操床しき若人が

崇き希望の象徴と仰ぐ

聖き北斗の瞬に

真理の道の暗示を索め

純しき玉の緒一百を

一つに懸けて結びたる

自治の基礎動きなし

六

烏兎流光の移ろひて

昔の友は在はさねど

十三年の光榮ある歴史

護り伝へて極限無し

自由の大旗正義の剣

天下の民を済ふべし

戦いの場の手途とて

宴の盃いざ汲まん